

「マタイ21章」

イントロ:

1. 文脈を確認する。
 - (1) 21章以降、エルサレムでの最後の1週間に入る。
 - (2) イエスの公生涯は3年半と計算する。
 - (3) 4回の過越の祭りが巡ってくるから。きょうの箇所は、その最後の過越の祭り。
2. きょうの箇所を理解するための予備知識
 - (1) 過越の祭りは出エジプトを記念する祭り。
 - (2) 変貌山の箇所(17章)で、イエスはモーセとエリヤを相手に話していた。
 - (3) イエスは、神の小羊としてエルサレムに入城された(ヨハネ1:29)。
 - (4) 出エジプト12:3~7
 - ①ニサンの月の10日に羊1頭を選び分ける。
 - ②ニサンの月の14日までそれをよく見守る。
 - ③その日の夕暮れ(午後3時)にほふって、その血を門柱と鴨居につける。
 - ④その夜、その肉を食べる。
 - (5) イエスは神の小羊としてエルサレムに入城し、5日間吟味され、ほふられる。
3. きょうの箇所は、私たちにとってどういう意味があるのか。
 - (1) きょうの箇所に書かれたことは、そのまま現代のイスラエルと関係がある。
 - (2) ユダヤ人たちはメシアを拒否したために、厳しい裁きに会った。
 - ①ユダヤ人たちは1900年にわたって離散の民として生活した。
 - ②1948年に建国したが、60年経った今も平和は来ていない。

(例話)第43回聖地旅行から帰ってきたばかり。
3月3日(月)にオリーブ山で騒動があり、そこに行けなかった。
イスラエル軍のガザ地区攻撃に対するパレスチナ人の報復。
世俗的なイスラエル人は、霊的な葛藤を覚えて神を求め始めている。
 - (3) イエスの預言の通りにユダヤ人の歴史は展開してきた。
 - (4) これからも、イエスの預言通りにユダヤ人の歴史は動いていく。
 - (5) きょうのゴールは、ユダヤ人の歴史を学び、いかに生きるべきかを考えること。

神の小羊であるイエスのエルサレム入城

I. 神の小羊の登場

1. ロバ

- (1) イエスは、ベタニヤ、ベテパゲ、オリーブ山、エルサレムと移動された。
- (2) イエスは紀元30年、ニサンの月の10日(日)にエルサレムに入城された。

- (3) この瞬間に、神の小羊が選り分けられた。
- (4) イエスがロバの子に乗るのは、ご自身をメシアとして提示するため。
 - ①ロバは平和の人、商人、祭司などのための乗り物。
 - ②イエスは平和の君として来られた(ゼカリヤ9:9)。
 - ③「主がお入用」とは、ゼカリヤ9:9の成就のために必要という意味。
- (5) 今もイエスは、私たちを必要としておられる。

2. 木の枝(棕櫚の葉)

- (1) 群衆はロバの子に乗るイエスを見て、イエスをメシアとして歓迎した。
 - ①小規模な奇蹟が起こっている(ロバの子が暴れていない)。
 - ②上着と棕櫚の葉
 - ③詩篇 118:25～26 を唱える人たち(詩篇 113～118 篇は「ハレルヤ詩篇」)
- (2) ユダヤ人の指導者たちがイエスを拒否したので、王国の確立は将来に延期された。
- (3) 群衆の期待とイエスの思いには、大きな隔たりがあった。
 - ①棕櫚の葉を振るのは、仮庵の祭りの習慣。
 - ②「ホサナ」(今私たちを救ってください)というのは、仮庵の祭りの祈り。
 - ③ゼカリヤ 14:16～21 には、メシア的王国の預言がある。
 - ④そこでは、仮庵の祭りが祝われる。
 - ⑤群衆は、メシア的王国が今にも確立されるという思いでイエスを迎えた。
- (4) イエスは仮庵の祭りの前に、過越の祭りが来なければならないことを知っていた。
 - ①弟子たちも、神の国のプログラムは理解していなかった。
 - ②孤独な道を歩むイエスの姿が見えてくる。
- (5) 私たちも、誤った熱心さではなく、聖書の知識に基づく熱心さを追求しよう。

3. 宮(神殿)

- (1) 最初の宮清めは、公生涯の初めに行われた(ヨハネ2章)。
- (2) この箇所にあるのは、2度目の宮清め。
- (3) なぜ宮清めが必要だったのか。
 - ①半シケルの神殿税は、ツロ貨(銀貨)でなければならなかった。
 - ②いけにえの動物は、神殿域で売られていた。
 - ③これらの商売は、大祭司の一家が管理している。
- (4) イエスは宮に対する所有権を主張された。これはイエスのメシア宣言である。
- (5) 子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいた。
 - ①祭司長、律法学者は、不平を述べた。
 - ②しかし、幼子による信仰告白が詩篇8:2に預言されている。
- (6) 民族的には裁きは避けられないが、個人的には信仰によって救われる人も出る。

4. いちじく

- (1) 空腹を覚えた。イエスの人間性を示す。
 - ①空腹感。
 - ②イエスは、初なりを期待されたが、何もなかった。
- (2) イエスとその木を呪うと、いちじくの木が枯れた。イエスの神性を示す。
 - ①いちじくの木は、イスラエルの民、特にパリサイ主義の信仰を指す。
 - ②見かけは敬虔そうであるが、霊的実質が伴っていない。
 - ③イエスはパリサイ的な信仰を否定された。
- (3) 弟子たちへの教訓
 - ①枯れたいちじくの木は、イスラエルの民の運命を象徴している。
 - * 紀元 70 年にエルサレムが滅びた原因は、不信仰にある。
 - * 後世のラビたちは、エルサレム滅亡の原因をさまざまに論じた。
 - ・安息日を大切にできなかったから。
 - ・経札を付けなかったから。
 - * 真の原因は、イエスのメシア性を否定したことにある。
 - ②知恵があれば、信仰の難問も解くことができる。
 - * 「この山」とは、難問のこと。
 - * 「山が動いて海に入る」とは、難問が解決されること。
 - * 弟子たちが、イエスの十字架の意味を理解するのは復活以降。

II. 神の小羊の吟味

1. ニサンの月の 10 日に小羊を選び分け、14 日までそれを吟味する。
 - (1) 紀元 30 年のニサンの月の 10 日は、日曜日。
 - (2) 14 日は、木曜日。
 - (3) イエスは 10 日から 14 日まで吟味され、15 日(金)に十字架に付けられた。
2. イエスは4回にわたって様々なグループの指導者たちから挑戦を受け、吟味された。
 - (1) 公にイエスを辱め、民衆の支持を失わせるため。
 - (2) ローマ法に違反している証拠を見つけるため。死刑にすることができる。
3. 最初の挑戦は、祭司長、民の長老たちからのもの(サンヘドリンの代表)。
 - (1) イエスの権威を問う。
 - ①何の権威によって、神殿から商売人を追い出したのか。
 - ②何の権威によって、ラビとして活動しているのか。
 - ③当時は、高名なラビの認定がなければラビにはなれなかった。

(2) ラビ的教授法を用いて答える。問いに対して、問いをもって答える。

①バプテスマのヨハネの権威は、どこから来たのか。

②彼らはジレンマに陥る。

* 天からと答えれば、ヨハネが示したメシアを信じないのは矛盾。

* ヨハネを否定すれば、民衆の怒りを買う。

③彼らは「分からない」と答える。

④イエスもまた、答えることを拒否する。

4. イエスは3つのたとえ話を用いて、間接的に彼らに答える。これもラビ的教授法。

(1) ふたりの息子のたとえ

①兄はぶどう園に行くと言い、弟は行かないと言う。

②しかし、兄は行かないで、弟が行くようになる。

③真の親子関係は、言葉ではなく、行為によって証明される。

④兄とは、祭司長や民の長老たちのこと。

* 彼らは、神が遣わす預言者を信じると告白していた。

* しかし、バプテスマのヨハネも、イエスも信じなかった。

⑤弟とは、取税人や遊女たちのこと。

* 彼らは信仰告白をしていなかった。

* しかし、バプテスマのヨハネが説く「義の道」を受け入れた。

* 彼らこそ、信仰によって神の国に入った人々である。

(2) 悪い農夫のたとえ

①ぶどう園をイスラエルの民にたとえるのは、旧約聖書の伝統。

* イザヤ5:1～7

* 詩篇 80:6～16

②家の主人とは、父なる神のこと。

* 主人は、手をかけたぶどう園を農夫たちに貸す。

* それから、旅に出る。

* 主人は、多くの収穫を期待している。

* 父なる神も、イスラエルの民から霊的な収穫を期待している。

③農夫たちとは、民の指導者たちのこと。

* 彼らは、主人が遣わしたしもべたちを苦しめ、殺す。

* 神は、3度にわたってしもべたちを遣わされた。

・ 捕囚期前、捕囚期後、バプテスマのヨハネ

④主人は、最後に自分の息子を遣わすが、農夫たちはその息子を殺す。

* 息子とは、イエスのこと。

⑤「ぶどう園の主人が帰ってきたら、その農夫たちをどうするでしょうか」

⑥「…情け容赦なく殺して、…別の農夫たちに貸すに違いありません」

⑦イエスの預言

- * 詩篇 118:22 の預言の成就(指導者が見捨てた石が礎の石となる)
- * 神の国は、その時代のユダヤ人たちから取り去られる。
- * 神の国の実を結ぶ国民に与えられる。
 - ・ これは、教会のことではない(置換神学の立場を否定)
 - ・ 患難時代を生き延びるユダヤ人のこと。
- * イエスに敵対する者は滅びる。紀元 70 年に成就した。
- * 今もイスラエルは、その影響を受けている。

⑧ユダヤ人も異邦人も、イエスを信じないなら同じ運命が待っている。

(3) 結婚の披露宴のたとえ(22章に入ってから扱う)

結論 ユダヤ人の歴史を学び、いかに生きるべきかを学ぶ。

1. ユダヤ人の歴史

- (1) イエスを拒否した結果、神の国は取り去られた。
- (2) 紀元 70 年にエルサレムが滅びた。
- (3) やがて彼らは患難時代を通過することになるが、最後にイエスを受け入れる。
- (4) その時、イエスの地上再臨が実現し、メシア的王国が地上に成就する。

2. いかに生きるべきか。

- (1) ユダヤ人に起こったことは、私たちの上にも起こる。
- (2) イエスこそ、ユダヤ人を二分し、全人類を二分する分水嶺である。
- (3) それゆえ、聞く耳のある者よ、今こそイエスに信頼して生きよ。